絶望を売る店トロイメライ

Ram F

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶望を売る店トロイメライ

【Ｎコード】

Ｎ７４５２Ｄ

【作者名】

Ｒａｍ　Ｆ

【あらすじ】

店主と私がお客様にお売りする不思議な『絶望』のお話です。

幻想への案内人

暗闇の中に洋灯が一つだけともされていた。空間の端も把握できない程の光だったが、私達にはそれで充分だった。

「本日のお客様は、この方です」
つね日ごろ変わらない常套句を店主の梟は私に投げ掛け、私に一枚の写真を手渡す。しかし、その写真のことなど全く覚えがない。
そうであるはずなのにその写真を受けとった瞬間、埋め尽くすほどの記録が脳内に射影された。

「年齢は１６歳で身長が１５０ｃｍ、体重が―。」
「烏君、能力を使うのはいいのですが、口に出すのはいけませんよ」
滅多に怒らない店主だが、礼儀、作法についてだけは少しばかり厳しかったりする。謹厳実直な上、誠実で容姿も良い、多少寡黙だが、正直、羨ましいと思う。
「すいません館長、以後、気をつけます」
「そうですか」
といって、店主は黙り込んでしまった―。

特別することもないので、私は写真を両掌にのせ目を閉じ、写真を消すことを想像した。
目を閉じた先には、何物も犯すことができない静けさとこの空間だけが存在し、お互いが影響を及ぼすかのように写真は、球状の黒い光に押し潰れたかのように消えていった。

「お越しになられたようですね」
店主が沈黙を破る。
確かに暗闇の方から、足音が近付いて来る。同時にいつも通り

「お願いしますね」
と店主は私に合図を送った。
私は、またもや想像した。お客様が一瞬にしてここまでいらっしゃることができる様なような『ドア』を―。

「本日は、『トロイメライ』にようこそ起こし下さいました。ご予約のエミル様ですね」　店主が、チョコレートに金色のノブをつけたようなドアの前で、慇懃な商売文句をお客様に投げ掛ける。
すると、扉からふっとお客様が擦り抜けてきた。
そのお客様はブロンドの髪に藍色の目をした可愛らしい女子だった。ぶかぶかの似合わない白衣をきていたのだが、それは彼女の性格を表しているようで、否定する気持ちは全く起きなかった。

「はい、そうです」
「招待状を確認させて頂きます」店主は、目を閉じ右目だけを開いた。

「何をしているんですか？」
「……」
「なんなの？」
「お客様、館長は貴女の心に送られた招待状を確認するため、音を遮断しているのです。その件につきましては私の方からお詫びするべきでした。」
「そう」
彼女は、納得したのか小さく笑ったように見えた。

「はい、間違いなくこの招待状です」店主が両目を開き説明を始めた。
「お客様にお送りした招待状に記載した通り、私どもはお客様に『絶望』を提供しております。わかりやすく言うと私どもは、お客様

が見たい、聞きたい、したいという欲望を絶たせるお手伝いをする仲介と思って頂いて構いません」

「そういう意味なんですか。私はてっきり絶望させてくれるんだと思いました」

彼女は少し残念そうに溜息を一つ零した。

「どうかしましたか？」

「あっいえ、なんでもないんです。なんでも…。」

店主はそれ以上深く追及しなかった。ここにくる客は『人生』に興味が持てないとか『おもしろさ』目当ての人々がほとんどだからである。

お客様の心を不用意に傷つけることは良いことではないし、店主の持つ能力でお客様の心を容易に見透かしてしまえるから聞く必要はない。

突然、店主が口を開いた

「おやっ、他のお客様もいらっしゃいましたか」

暗闇には、エミル様、私、店主の三人しかいないように見える。しかし、店主には確かに見えているようだ。これも店主の能力の一つなのだろうか、本当に不思議な人だ。

「烏君、エミル様をよろしくお願いします。」

「はいっ」私は反射的に返事をした。

しかし、狡猾な私は彼女を気にしながら店主とお客様との会話を耳に入れていた。

「お客様は招待状をお持ちでないようですね」

「……」

お客様は無言だが、心を見透かす店主にとって会話など無意味に等しい

「そうですか、わかりました。では、今回は『見学』ということでどうでしょう？」

私は店主の言葉に驚愕した。

　動かずにはいられない衝動を奥歯の痛覚でなんとか押さえ込み、脳内に紙を一枚投影した。

2.

脳内に投影した紙は先程の写真である。本来、力を使える私にとって紙を創作するなんてことは造作ないことなのだが、聴覚に力を使いすぎたので、少しばかり想像能力が低下したからである。

粒子から紙を創造するのと写真から紙を創造するのでは、月とスッポンだろう。

両掌を握り、引き伸ばすように手を動かす。指からは白い稲妻が放出され、第一関節を薄く囲み込んだ。そして、その稲妻は右手と左手の空間の中心に向かって進み、絡み合っていった。

その光景はまさに操り人形の白い糸が絡んでしまったといったところだろう。

１０本の絡み合った稲妻は、段々と薄白い球体を造りだし空中に漂うように安定した。

球体内に引力でも働いているかのように、表面の粒子が中心に向かい、写真へと変化していった。

その光景を目の当たりにした彼女は眼を見開いていた。

「すごい」と一言だけ葉を呈した。私は興味深々のその視線になんとなく気分が良くなった。

「本来なら禁止されているのですが……、この写真をお取り下さい」

「いいんですか？」

「もちろん」

二人の関係が徐々に変化する様を店主が見たら、何を言われるだろうか、考えるだけで恐ろしい。しかし……。

彼女は手を球体に伸ばした。恐る恐ると言った具合に震えるその手は、球体まで届くまで幾分の時間が掛かった。しかし、彼女の眼は恐れなど知らない子供のように真っ直ぐに球体を見つめ、今にも触れようとする決意で溢れていた。

空間には張り詰めた沈黙が流れている。段々と近付く指の先の緊張が空間を服従させているような違和感（プレッシャー）が私にも伝わった。

3.

そして、彼女の指が球体に触れた。その感触が私にも伝わり、神経に稲妻がはしった。私はその稲妻に、一瞬気を取られてしまった。

最悪なことに球体の表面が不規則に変化し、消滅しようと小さくなったように感じられた。

意識を集中し私は球体の維持をどうにか保っていた。

「お取り下さい」

「……」彼女は無言で頷いた。

彼女の手は球体を貫き、写真にゆっくりと指を近付けていた。

そして、写真に指が触れた瞬間、球体が蛍火のような光を放ち、彼女は手を引き抜こうとした。

「抜いてはいけません」

躊躇がない、激しい言葉に驚いたのだろう。彼女は、終始黙ったまま、いっこうに動こうとしない。

「あの、すいません。驚いてしまって……、えっと……、すいません」

「仕方ありませんよ、いけなかったのは私です」

「どうしてですか？」

「お話しますが、その前にどうぞ手を自由になさって下さい」

「そうですね」笑いながら彼女は手を引き抜いた、写真をしっかり持って……。

「申し訳ありません」

「なぜ謝るんです？」

「私は、二つほど大きなミスをしました」

「いいですよ、気にしないで下さい」

「いえ、そういうわけにはいかないミスです。エミル様が手を入れ

た瞬間にバルが不安定になり、消滅しようとしました。引き抜こうとした時もです。バルの消滅は、物体の消滅と同義、もし、あの瞬間バルが消滅していたら、エミル様の御手は……」

「そうですか」その言葉意外、彼女は言葉を止めた。

空間の中は棺桶のように冷たかった。更に私には、外から悲しみが押し込まれているのではないかと感じられた。身を滅ぼしかねない程の自己嫌悪で私は耐えられなかった。

そんな重々しい空間を一蹴したのは彼女だった。

「あの、バルってなんですか？」

「説明不足でしたね、申し訳ありません。バルと言うのは、あの球体のことです。私達が空間に何かを造り上げるのに必要な粒子を集めて、固める役目をすると思って頂いて構いません。専門家が言うには物理法則には逆らっていない見たいです」

彼女はなにか考えているのか、一瞬会話に間をあけた。

「確かにそうみたいですね」彼女の可愛らしかった顔が、大人びて見えた。

4.

「エミル様は……、」
「なんですか？」

「可愛らしいですね」
「えっ……」
私は、彼女の過去を掘り起こしてしまいそうになった。なんとか誤魔化したが、きっと気付いていると思う。

最悪の事態は回避したと思うが、このままではよけいな事を話かねない、仕事に戻ろう。
「ではエミル様、その写真を私に貸して頂けますか？」
「……」
「エミル様？」
「はっ、はい。すいません写真ですね、どうぞ」彼女は、そっと私に写真を手渡した。
「ありがとうございます」

写真には彼女の姿があったが、やはり今の彼女とは明らかに違った。写真の中の彼女は異様な恐さがあった。
「不思議ですか？」
「えっ……、はい」
彼女は笑みを一つ零し
「正直な方なんですね、そういう人嫌いじゃないです。皆そんな人達なら、生きやすいんですけどね……」
「生きるのがお辛かったんですか？」
「えっ……、私そんな風に言いましたか？」彼女は少し考える素振りを見せ、話を続けた。

「言ったんでしょうね、今日は少し楽しいんです。だから本音が口に出てしまったんだと思います」
やはり彼女にも背負っているものがあり、なんとかここまで生きて来たのだろう。

私は彼女に何ができるのか考えた。脳内の全ての機関をフル活動させ、彼女の安息だけを優先させた。
喜ばしい事に、一つの答えを見つけだした。
「できればでいいんですが、少しばかり、私の話に付き合って頂けませんか？」
彼女は霞みがかった微笑みで
「いいですよ、寧ろ聞いてみたいです」と返答した。

5.

「ありがとうございます」
「ところで、どんなお話なんですか？」
私は、できる限りの笑みを作り
「ここに来たあるお客様のお話です」と答えた。
それを聞くや、彼女は好奇心で目をキラキラとさせた。雛のように愛らしい瞳は、全ての男（もの）を引き込んでしまいそうな魅力があった。

私は彼女のそのにこやかな表情を一瞥し、一冊の本を体内から取り出した。
「どうしたんですか下ばかり見て？」
「本ですよ、ここに物語の本があるんです」
「何もありませんよ」
彼女は少し怪訝そうに私を見た。具体的な理論の一つ話さなければきっと納得しないという意志がヒシヒシと伝わった。

その本は見えない紙で造られ、見えない文字で書かれている。勿論、私にも見えないしお客様にも見えない。
店主ならばあるいは見えるのかもしれないが……、誰にでも読むことはできる。不自然なことだが、空間の影響だと考えれば納得するしかない。現象が現実に起こっている以上、納得するしかない。
例えそれに的確な理論をつけられたとしても、見えないのだからマジョリティーには受けいれられないのは当然。ならば論より証拠、彼女にも証拠を観せるしかない。

「持ってみますか？」
「はい」

彼女の肯定の意思を受け取った私は、右手に本を握り、彼女に差し出した。　彼女は意外にも素直に手をだし、本に手をかけた。
彼女の手が本を握ったのを確認した私は、そっと手を緩めた。
「本当に本だったんですね、すごい……」
歳相応の無邪気さがなんとも微笑ましい。
「読んでみてもいいですか？」
彼女は突然そんなことを言い出した。しかし、期待に答えるわけにはいかないので一蹴した。
「申し訳ありません」
「そうですか、仕方ないですね」

「では、本を」
「どうぞ」彼女の手から本を受け取った私は話を始めた。

誤解

「気に入って頂けましたか？」
「……」
お客様は、それを否定するかのような沈黙を呈した。沈黙は雨の如く力強く、優しく、そして、いたく厳しかった。
　異常聴域というのをご存じか、噴火などの大きな音が伝わる時に、ある場所では音が聞こえず、それより遠方の区域でよく聞こえる不思議な現象のことを言うのだが、それに似た現象がこの空間内で生じているのではないかという錯覚が私達には感じられた。　その錯覚、音が造り出す分散と共鳴、それらたくさんの沈黙（おと）が我々に向けられ、卵殻のように包みこめられた。
「そうですか、それは残念です。もし宜しければ、まだ観ていかれても構いませんが……、いかがなさいますか？」
「……」
店主の申し出は肯定の意思だけに伝わり、いくらかの沈黙がより静かな沈黙へと変わった。
　幾分か洋灯の火も広がった気がする。ぽわぽわとゆれる灯ったその火は、
暗闇の中に溶け込んでいた腰掛けをほんのりと浮かび出させた。
「お掛け下さい」
「……」
「私は予約のお客様の応対をしなければなりませんので、申し訳ありませんが失礼します」
「……」
店主が彼女の下へ闊歩しだしたのは、ちょうど私が本を取り出した時であった。
「それにしてもよくない傾向ですねぇ」

コノハズクの様に鋭い顔つきで、店主は訝しげに独語をたれる。
「おやおや、『虚無と無限の書』も使うつもりですか」店主の肩越しには、異様な力が空気を押し出していた。
悪寒、まさにこれがそうなのだろう。そのそれが渦を巻いて私に伝わった。

2.

「烏君」
店主は微笑みながら丁寧に私を呼び付けた。
「すいませんでした」
私は颯爽と赴き、何も言わず、ただ頭を下げた。
失敗をしたという申し訳なさと、こんなことをしてしまったという驚きが、私に謝るということをさせる。
「反省しています」
しかし、ひたすら平謝りする私に店主は意外なことを言うのだった。
「何故、中途半端なのです？」
「何がです」
「何がではありません。貴方がお客様の為にしたことですよ」
「中途半端でしたか？」
「そうです」
規則違反はしたが、中途半端なことは断じてしていないと思うのだが。
「貴方がお客様の為にバルから取り出させたり、『虚無限の叙事録』を使ったりすること自体はいっこうに構いません。しかし、最後まで責任を持つべきです」
「……」
私は黙りながら店主に肯定の意思表現を呈した。
「貴方には、エミル様のことをお頼みしましたよね？それは、例え規則違反をしてでもエミル様に精神誠意のサービスを提供しなさいという意味です。」
「はい」
私は、下唇を甘噛みしながら静かに肯定した。
「ですが、貴方は聴力に神経を集中させていましたよね。それは必要ないことではないですか？」

「自分もそう思います」
「ということはバルは必要なかったんではないですか？」
「……」反論する道理を持ち合わせていない私は、ただだんまりするしかなかった。
「貴方もご存じの様に、『創造』は私と貴方の力ではありません。この空間の力なのです。私達は契約を交わし、この空間の時空を扱っているだけにすぎないのですよ」
　私はここだけは口を開くべきだと思い、震える上下の唇の間に、数ミリ距離をとって声をだした。
「だからこそ、よけいな力を使えば空間の消滅につながりかねない……」
「そうです」
空間の消滅とは、先程の事件もそれにあたる。エミル様はこの空間の中の空間に過ぎないからだ。
「まぁ今回は大事に至らなかったので、よしとしますが次は気をつけて下さいね」
「はい」
私はこの事を胸に、ある決意を決めるのだった。
「ところで、エミル様は黙読中ですか？」
「はい、そこの椅子に座り本を読まれていますよ。スゥスゥと可愛らしい寝息をたてながら……」　ここでの読むという行為は実際に文字の羅列を頭に入れるのではなく、映像鑑賞に近いものと思われて構わない。
「そうですか。それにしても何故、本を埋め込むと皆寝てしまうのですかね」
「この空間のせいですよ」と私は笑いながら答えるのだった。

迷人

見知らぬ風景に、見知らぬ人達、そして、全く知らない土地、トロイメライとは似ても似つかない程の環境に彼女はいる。
『私はどこにいる？』この疑問ばかりに精神をつかい虚無感を味わっているのではなかろうか……。

「……」
言葉もでないのは、言うまでもないでしょ。この現象をどう認識すればよいのか、どう対処すればよいのか、全く検討がつかない。
「これが絶望？そんな訳ない。そうだったとしたら、私の境遇の方がよっぽど絶望してるもの」
私はそんな絶望感、いいえ、虚無感を味わいながらお世辞にも道路とは言えない道の端っこで、ぼけっと突っ立っていた。
思案していたことと言えば『もしかして私は異次元にいるのでは？』『そんな中にまぎれこんでしまったのでは？』そんな希望を望んだり、『私のアホらしい夢』『精神異常』と、わりと現実的な判断をしたりしていた。
しかし、まず考えるべきことは他だった。
「これからどうしよう……」
あてもなく彷徨って迷子になんてなりたくはないし、食料といえるものなんて何も持っていない。それに、私の話せる言語が使える保証もない。
どうしようもできないなら、いっそ動かない方がいいんじゃないかしら。
どうやらここは町かなにかのようだし、水くらいは頂けるわよね。
「ウェ～イト」
突然、可愛らしい女性の声が聞こえた。こえた。その声が気になった私は、声がした方に顔を向けた。

すると、ライムやらリンゴやらがコロコロと転がっているのがわかったし、そのちょっと上方では、私より小さい少女が紙袋を持ちながら、必死にそれを追っていた。

決して速いスピードで転がっていたわけでははなかったけど、目一杯にパンやら果物やらを詰め込んだ紙袋を両手で持っている彼女にとっては、非常に苦しいスピードなのかしら……。　私は、そのライムとかを拾い、彼女の元へ向かった。

「ヒアユーアー」

叫んでいた言葉のおかげで、言語が使えることがわかったのは、不幸中の幸いとしかいいようがないわね。

「センキュウ」※以下日本語

「お母さんのお手伝い？」

「違うわ、お母さんはいないもの」

「そう」

私はこの言葉以外思いつかなかった。

2.

私が口を閉ざしているのを少女が察したのか
「別にいないから大変だ、とかはないわよ。いなくていいのよ、あんな奴」
彼女の過去には、母親は悪魔のような存在なのかしら、普通はあんなふうに言えないものね。
「家族はあなたひとり？」
「まあ、そうね……。ひとりはいないようなものだし」
それは、母親のことかしら
「それってお母さん？」
「違うわ」少女は不機嫌そうに返答し、話を変えるかのように私のことを聞き出した。
「あなたここの人間じゃないわね、どこから来たの？」
「私はデルツのユデアルからきた、エミルよ」
「！」
少女は言葉を出さずに驚き、哀いそうな子犬をみるような目で私を見た。
そして、真剣な眼指で
「逃げてきたのね」
と言った。
しかし、私には逃げて来たという事実はないし、以前にもそんなことはしていないから少し戸惑いを感じた。「逃げてきてはいないわ」
「そう、でも困っているんじゃない？」
「……」
私は無言のまま、小さく頷いた。
「だったら私のとこに来なさい」
少女はそういうと私の手をとり、有無をいわさず走りだした。

「ちょっと待って、早い」
少女は真剣に走っているためか後ろを向こうともせず、脱獄者を手助けする仲介のように私の手を力強く握って放そうとしなかった。
「何言ってるの？急がなきゃまずいわ」
「まずいって何が？」
「あなたがよ」
私はこの子の言っていることがまだ分からなかった……。

選択の前に

エミルの体から擦り抜けるようにして、本の威圧感が感ぜられた。彼女の罪悪が空間に吸収されるかの如く渦を巻く。だんだんと存在感を増すそのそれらは、空間の不安定さを感じさせる。

洋灯も心なしか不安そうにぶるぶるとしている。全ての空間が

「どうすればいいの？」

と言ってるのかもしれない。

それら全ての不安が私を圧迫する。私は何故、彼女にこのような辛い思いをさせなければならないのだろう。　世界中に数多存在する一般的美少女では、彼女は満足できないのだろうか……。

自問自答を繰り返す度、罪悪感はつのるばかり、偽善という名の後悔が私を突き刺して、十字架に張り付けられているような気さえする。

他に術があったのではないか？と、後悔が後悔を呼び、終わりのない無限回廊の世界に迷いこんで途方にくれる。

結局、私は何がしたかったのか自分でも全くわかっていない。時間だけが刻々と秒を刻み、彼女の罪悪も無に近くなったように感じられる。私は彼女になんと声をかければいいのだろうか……。

「終わったようですね」今の私にはなんと残酷な一言だろう、店主は張りつめた私を追い込むかの如き残酷なことを告げた。

義務ゆえの絶望与、権利ゆえの後悔、それら全てがエミルの中の本を創造した。

硝子のように弱い心、

鋼のように開かない心、

創造する力は先程の引力、引き抜く

「お帰りなさいませ」
「ここは……、そう、やっぱり夢かなにかだったのね」彼女はなにごととも言えない表情をしていた。
「いいえ、あの世界は現実です。さらに言えば過去ではありません。『未来』です」
「だってあれは過去でしょ？」
エミルは驚きを隠そうともせず、私の言分を否定した。
「いいえ、あれは間違いなく未来です。ただし、本来なら有り得ない未来、つまり正しい時間軸の未来ではないということです」
エミルは思慮深く何かを考えているのか、いっこうに口を開こうとしなかった。いや、開くことができなかったのかもしれない……。
「もしかして私のせいですか？私があの世界に行かなければ、カルッカは生きていたかもしれないんですか？私が絶望に興味がなければあんな思いをしなくてよかったんですか？」息をあらげながら彼女は、私を責める
「一概にそうとは言えませんがその可能性がないとは言えません。しかし、私達、もちろん貴女を含めてですが、私達にとってはあの世界（未来）は元々なかったものです。ですから気に病むことはありません。しかし、このことを忘れないでください」
私には重大な最後の仕事が残されていた。これは、私の義務であり、権利でもある質問……。
「それでも行きますか？」

決意の後に

「あなたが思い描く絶望の世界に行きたいですか？」
エミルは困惑した表情のまま小さく息を吸った。暗闇の中の洋灯の光がエミルの瞳を初めのころのような輝きに映し出していく
「行きます」
「私が望みを絶ってきます」
エミルは強い意志がこもったその目をらんらんと輝かせていた。
「わかりました」
私はそう一言いうとある一つの扉を思い描いた。狭き狭き扉を……。
「本当にお行きになりますか？」
私は発狂しそうなほどの感情を押し殺し、ただエミルの表情を見ることもできずに冷静に話し続けるだけだった。
「はい、私があの子にできることをしたいんです。それが私が私にできる最大の事です」
「そうですか」
私は最後まで何もできずに彼女を見送らなければならないのか、ひどく自分の無力さを感じてしまう。せめて終わりぐらいは
「貴女の選択は、貴女自身のものです。ほかの誰のものでもありません。きっとそれでいいのではないかと思います。最後に一言だけ、いってらしゃいませ、エミル様」
私は精一杯に笑顔をつくり、彼女に伝えたかった。
おこがましい私のただの言葉、彼女にはなんと聞こえているのだろう。できることならば、思い留まってもらいたい。そんな自分本位な理屈を論じたところでどうしようもないことはわかっていた。
だからこそ、辛い……。
「行ってきます」
エミルは頬を緩ませ、正直な笑みを残し扉を開いた。
洋灯の光に照らされていた闇に一片の光が生まれた。

2.

「着いたわ」
息をきらせながら、警戒心らしき威圧感をすっと消し去り、胸をなで下ろし、握っていた手をゆっくりと放した。少女の手には、否に冷たい汗がじわっと滲み出ていた。
私の目先に見えるのは、木々たちの美しい景色、遠近法が巧みに用いられたお庭は、私に場違いですよと言っているかのようにやけに広かった。絵になるなぁと感心する反面、異様な羨望というか、憎悪というか、そんな汚れた負の塊が私の中にひっそりと生まれていたなんてことは、私だけの秘密……。
秘密にする必要は全くなかったけど、私だってある程度の人間らしさはあるし『人間ですか？』と言われれば、人間って答える。
「立派なお屋敷ね」
私が正直な感想を告げた。
彼女の反応を体感した私の心は、春一番のような突風が南方よりぴゅんと駆け抜けたイメージかしら、木々をざわつかせたと思ってくれない？
「私は嫌いだけどね」と呟いた。
広葉樹の緑はふてぶてしく周期的にざわついていた。それはまるで私に何とかしろと言わんばかりで嫌だった。
木々を意識的に目に入れさせ、私はとぼとぼとお屋敷まで歩いた。木々のふてぶてしさは、よりいっそう増し、要りもしない沈黙を私たちに贈与する。
人間というのは不思議なもので、こういうとき無言というわけにもいかないと思ってしまう。
だから、その最中にはたわいもない会話を少しした。本にたわいもない話だから話すようなことでもないけど……、
「随分広いお庭ね」

「それって皮肉？」
少女は少し嫌そうな顔をした。この表情が感情と本に一致しているかどうかなんて私には分からなかったけど、どんなシチュエーションを考えても負の感情からであるのは間違いなさそうだった。だって話しかけた後に少し間があったから……。
「冗談よ、うん、まあそうね、この辺りでは私の家が一番大きいかもしれないわ」
「そうなの」
「そんなことよりもあなたは、ここではよけいなことを言わないこと、特に出身については絶対に口にしてはだめ」
私は少し困惑しながら
「わかったわ」と一言だけ口を開いた。
しかしなぜだろうか、困惑の中にも違和感を覚える？いや、なにか不思議な感覚がする。
木々は私の中の不可思議な疑問を吹き飛ばすかのように揺れ始めた。

困惑の赴くままに

「エミル様は今頃何をしていると思いますか」
私は店主と共に先ほどのことを話していた。
「そうですね、きっと、時の導きのままに幾時かを重ねているのではないでしょうか」
残酷なことに店主は私が思っていた言葉をくり返し、私を絶壁へと追いやる。
「やはり、そうですよね」
私は確かにそう言っていたのは間違いはないだろう。私自身訳、わからない言動ではある。しかし、今の私には非常に重々しく体中を埋め尽くしている。一つの感情に赴いてしまいたいという感情、それは非常に懐かしく、私の本質に近いのかもしれない。だが、そうであったとしても私に何ができるというのだろうか？
一人の兵士を戦火に赴かせる隊長のごとき悲壮、
私には何もできない。

いや待て、本当にそうであるのだろうか？
「館長」
力強いその声を待っていたかのように店主は目を見開いた。
「わかっていましたよ。貴方がきっとそうしたいということをね」
「すいません、ありがとうございます」
「では」
そういうと店主は自身の視界を完全に遮断し、空間を束ねるかのように手を軽く握った。
「ここからは貴方の仕事ですよ」
私は何をすればいいのだろうか、何をするべきなのだろうか。私の

心に完全な回答がある訳がないことなどわかりきったことであるのに、未だに散策してしまう。きっとそれが選択であるのだろう。それを選ぶこと自体が回答ではないだろうか。そう思いたい。

ここで私がしたい解答は……。

洋灯のほんのりとした光は、それはそれは力強く輝きだした。

まるで、最後の灯火のように、

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7452d/

絶望を売る店トロイメライ

2010年12月17日02時47分発行